

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

教授 高村 浩司

1. 教育の責任

日本の人口は、2007 年に高齢者の割合が 21%を超え「超高齢化社会」を迎えた。その翌年からは人口減少、さらに 2065 年には人口の約 25%が後期高齢者となり、高齢化も 38%を超えると推測される状況にある。そのため、医療介護業界の需要が低くなるとは考えにくく、理学療法士の需要も増え将来性のある仕事と認識されている。しかしながら現在は毎年 1 万人程度の資格保有者が誕生するなど理学療法士の数が増え続けている。厚生労働省の資料によると理学療法士の供給数は、2040 年に需要数の約 1.5 倍になると推測され今後は競争化が進むことも懸念される。

理学療法士が社会に必要とされ、今後も生き残る職業であり続けるためには、学生教育が国の方針や社会のニーズに応じていく広い視点を持つとともに他の理学療法士と差別化をはかる教育体制の構築が重要であると考えます。

私は健康科学部の理学療法学コースの教員として専門科目を中心に担当している。過去 2 年間の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている

主要な担当科目は、神経系領域に関する理学療法の専門科目となっている。そのほか、理学療法概論や臨床運動学などの科目を担当している

2022 年度

科目名	時期		受講者
神経系理学療法学実習	前期	必修	61 名
理学療法概論	前期	必修	66 名
臨床運動学	後期	必修	78 名
神経系理学療法評価学演習	後期	必修	79 名
			名

2023 年度

科目名	時期		受講者
神経系理学療法学実習	前期	必修	65 名
理学療法概論	前期	必修	47 名
臨床運動学	後期	必修	65 名
神経系理学療法評価学演習	後期	必修	64 名
			名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 一般社団法人 日本神経理学療法学会 理事
- 2) 一般社団法人 山梨県理学療法士会 副会長
- 3) 公益社団法人 日本理学療法士協会 代議員
- 4) 一般社団法人 日本神経理学療法学会 専門会員
- 5) 一般社団法人 リハビリテーション教育評価機構 評価員
- 6) 健康科学大学 学生募集委員会 委員長
- 7) 健康科学部 入学試験委員会 副委員長

1) の活動に関しては、現在の神経理学療法の流れ（ガイドラインの策定など）を決めている理事という立場にありいち早く最新の情報を取り入れリアルタイムに授業や卒後教育に反映させることができる。2) 3) に関しては医療、介護保険分野での新たな制度理解と組織内代議士に理学療法士の身分保障について直接意見を述べることができる。

5) に関しては評価員を務めることでリハビリテーション教育評価機構の最新情報が得られ本学での受審準備を進めることができる。また他大学の評価を行う際に教育に関する有益な情報を得て本学に転用を図ることができる。

2. 教育の理念・目的

本学の教育理念は、先に述べた今後ますます高度化・多様化する我が国の医療・保健・福祉の分野で、国民のニーズに的確に対応しうる人材の育成である。特に豊かな人間性と高い倫理性に立脚した高度な専門性を備え、他の専門領域についても横断的・融合的に理解・研究・実践しうる人材の育成を目指している。さらに本学は、これからの福祉社会の発展に寄与するために、様々な複合的問題に立ち向かうことができる問題解決能力を備えた人材の育成を目指す。

建学の精神・基本理念にもうたわれているように、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の三つを兼ね備えた人材を育成することが本学の使命である。本学の教育理念に基づき、私は学生教育に関して、専門的な知識や技術だけでなく自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力を養うことを学修の目標と考えている。特に理学療法学コースでは、幅広い一般教養と知識偏重ではなく、患者様や利用者様から慕われ信頼される医療従事者の育成に力を注いでいる。

3. 教育の方法

教育方法については講義形式のみでなく学生同士のディスカッションを主としたアクティブラーニングを多様に取り入れている。対面では授業開始、終了後の基本的な挨拶を徹底し、身だしなみを含めた節度ある生活態度の重要性を指導している。

・現場に即した実践的授業

神経理学療法関連の授業では、国家試験に出題される知識はもちろんのこと臨床に即した形で授業を形成している。例えば、担当者がこれまで関わった患者様の動画を視聴し必要な検査項目の列举、クリニカルリーズニング、目標設定、治療プログラム立案など個人またはグループワークを通じて実践教育を行っている。

さらに検査の仕方など理学療法評価法で獲得した技術の再確認と神経理学療法における患者様とのコミュニケーションのはかり方、治療テクニックの紹介など体験型授業も随時行っている。

・Teams を活用した授業の工夫

Teams の機能を利用したオンライン講義の中で Forms 機能を活用したクイズ形式の復習は効果的であり実践している。また脳画像学習においてはスマートフォンのアプリなども利用した学習方法を紹介するなどして一定の効果が確認できている。

理学療法概論の授業では、理学療法士としての倫理を徹底的に伝えどのような理学療法士像を目指すかを学生個々に言語化させ漠然とした目標からリアルな職業思考を持たせるよう授業の組み立てを行った。

4. 教育の成果・評価

FD 委員会によって実施されている授業アンケートを活用して授業内容の反省とともに今後の改善点を模索している。また学生からのコメントを受けて次年度のシラバスや授業内容に反映させている。

・臨床運動学

基礎的な知識学習だけでなく問題解決型の演習スタイルも行っている。特に正常運動の理解については学生同士の実技を通じたやり取りの中で実際に動作を体験したのち患者様の動画を視聴し、その動きの違いを確認する。動画を利用した授業は好評であるが、動作分析を行い明文化する作業は難易度が高く難渋している学生が多い。学生からの評価は総じて高いが動作分析は難しく苦手意識を持つ学生が多いのも事実であり学生への理解度をさらに向上させる工夫を行う。

・神経系理学療法学

神経系理学療法評価学演習と神経系理学療法学実習を2年次と3年次に担当している。

主に 2 年次では知識中心の授業を、3 年次にはそれを応用できる能力（特に臨床思考過程）向上を図っている。国家試験対策には、2 年次より過去に国家試験で用いられた問題や改変した問題を幅広く解かせ解説し対策を図っている。またアンケートから得られた結果によると多くの学生が画像から得られた情報を臨床に結びつける工程が苦手なため独自の資料を作成し理解を深められるよう対応している。

今後の目標

短期目標：授業内容の改善と国家試験対策の強化、神経理学療法学会活動への充実
授業内容について国家試験との整合性が図られているかを常を確認し、必要に応じてブラッシュアップを図っていく。また、時代とともに変遷されていく神経理学療法の流れを察知し、いち早く授業に取り入れ卒業教育にもつなげていく。

長期目標：患者様や医療従事者に信頼される人材養成
医療人は、様々なバックグラウンドを持つ患者を対象とすることが多いが、その対応にあたっては、患者様一人一人のバックグラウンドについての理解を含めた全人的な医療が求められている。また、個々の疾病の中に新しい発見があるといわれるように、常に疑問を持ち問題を解決していくことが必要である。

このため、医療人には、幅広い教養を持った感性豊かな人間性、人間性への深い洞察力、社会ルールについての理解、論理的思考力、コミュニケーション能力、自己問題提起能力や自己問題解決能力などを持つことが求められている。このような医療人としての資質を育てていくことを目指していく。